

撮影した写真の振り返りによる 大学生の自己発見および自己表現

○竹田奈央・石田 弓
(広島大学大学院教育学研究科)

問題と目的

写真療法は、山中 (1976) によって実施された芸術療法であり、写真映像が治療過程の中での確にイメージ展開を促し、メッセージを伝えるものとして精神療法場面で有効であるとされている。また、藤本 (2009) や大石 (2010, 2012), 向山 (2010) は、過去の写真や現在の写真、自叙写真が撮影者の内面を知り、自己発見、自己表現の手段となると指摘している。本研究は、写真が持つこうした特長に注目し、撮影者が撮影した写真を振り返ることで自己発見や自己表現が促されるかどうかを描画体験尺度 (土田・田中・今野・丹・赤坂, 2012) を用いて検討する。また、写真を振り返ることによって得られる自己に関する気づきの内容の特徴についても検討する。撮影対象は風景とし、撮影テーマは「惹かれた風景」とした。この撮影テーマにすることによって、投映法のように、風景に投映された撮影者の内面に言及した語りが振り返りで得られると考えられる。

方法

調査対象者 大学生 21 名 (男性 8 名, 女性 12 名) を対象とした。

尺度 描画体験尺度 (土田ら, 2012)(以下, 体験尺度)。発見促進因子, 表現促進因子, 直面・抵抗因子の 3 因子で構成される。7 件法。

手続き 個別で行った。【1 回目】撮影する写真の内容, 枚数などについて教示した。撮影期間は一週間とし, カメラは調査対象者所有のものを使用した。【2 回目】1 週間後に実施。撮影した写真のうち 2 枚を選ばせ, 2L 判の大きさに印刷し, それ以外の写真は A4 の用紙に 9 枚入の大きさに印刷した。続いて, 写真を用いた半構造化面接による振り返りを行い, 体験尺度への回答を求めた。

結果と考察

体験尺度の結果 土田ら (2012) と同じ因子構造で項目分析を行った結果, 自分の考えや自己イメージの再確認に関する再確認促進因子, 自分の新たな側面の気づきに関する発見促進因子, 表現

促進因子, 直面・抵抗因子の 4 因子に分かれた。体験尺度の項目を見ると, 調査対象者が撮影した写真を振り返ることによって, 自身の好きなものや興味, 関心などについての再確認がなされやすく, 自身の新しい側面に気づく可能性もあることが示唆された。さらに, 自身を見つめ直すことができ, 自分を表現できてよかったと感じていたことが示された。一方, 写真を振り返ることへの抵抗は生じにくく, 侵襲性は低いことが示された。

気づきの分類と内容 写真の振り返りで得られた言語データを意味のある文節で区切って抽出し, 心理学を専攻する大学院生 3 名と KJ 法を援用してカテゴリー分けを行い, 「自己に関連した気づき」を見出した (Table 1)。「自身の好み」は比較的多くの調査対象者が気づきとして得ていた。自分の「価値観」に気づいたり, 自身の現状に対して「反省」するなどした対象者もいたが, 気づきを得た人数が少ないカテゴリーがほとんどであり, 本研究で用いた撮影テーマでは深い内省や自己発見に至るのが難しいことが示唆された。自己発見や自己表現を促すためには, 教示や撮影テーマ, 質問内容の工夫が必要になると考えられる。特に, 臨床場面で用いるには, 撮影者が抵抗をあまり感じずに, 自分の思うように取り組むことができる教示や撮影テーマを設定することが重要である。一方, 自分の撮影の仕方や写真の特徴に言及している対象者が多く見られたことから, それに対する質問を重ねることで, 写真の特徴や撮影中の行動を手がかりとした自己に関する気づきが得られるのではないかと考えられる。

Table 1

自己に関連した気づきのカテゴリー(人数)			
自身の好み	再確認(8)	価値観(1)	
	新発見(12)	自身の特徴(8)	
心情	再確認(1)	好きな写真	再確認(4)
	新発見(2)		新発見(3)
生活状況	行動(3)	撮影の好み(5)	
	生活スタイル(3)	撮影に至る内的要因(4)	
	反省(1)		